

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 1 日現在

機関番号：33909

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530685

研究課題名（和文） 性犯罪に対する女子大生の防犯意識を阻害する要因の解明

研究課題名（英文） Elucidation of the factor to obstruct the formation of the awareness of the crime prevention of the female college student for the sexual crime

研究代表者

笹竹英穂（SASATAKE HIDEHO）

至学館大学・健康科学部・教授

研究者番号：00319229

研究成果の概要（和文）：

女子大生の性犯罪についての防犯意識の阻害要因を解明することを本研究の目的とした。阻害要因として、楽観主義バイアスを取り上げた。楽観主義バイアスは、被害にあう頻度および被害の程度の2つを設定し、それぞれ直説法と間接法で測定した。その結果、特に被害体験がある場合には、楽観主義バイアス（程度）が高いと防犯意識が低いことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research is to investigate the impact sex-related dangerous events that cause harm have on the awareness of crime prevention of female college students from the perspective of optimism bias. Two types of optimism bias were set: optimism bias that compares the certainty of encountering harm with of others (frequency) and optimism bias that compares the severity of the result of encountering harm (degree). Both types of optimism bias were measured using a direct method and an indirect method. The results indicated that in cases where harm was encountered, when the optimism bias (degree) is high, the crime prevention awareness is low.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	200,000	60,000	260,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：防犯意識，女子大生，楽観主義バイアス

## 1. 研究開始当初の背景

毎年2000人以上の女性が強姦事件の被害者になり、心身に重大な傷を負っているにもかかわらず、女子大生の防犯意識は低い。性犯罪に対する女子大生の防犯意識はなぜ高まらないのか、その阻害要因を明らかにする必要に迫られたことが研究の発端である。

そのためにはまず防犯意識はどのように形成されるのかについてのモデルを構築する必要がある。この点に関連したこれまでの筆者の研究としては、リスク認知、犯罪不安、犯罪情報への関心の変数を用いて、防犯意識の形成モデルの構築を試み、このモデルが犯罪被害の有無によってどのように異なるの

かを明らかにした(笹竹, 2008)。さらに防犯意識の形成の阻害要因のひとつとして、抑うつを取り上げ、このモデルが抑うつの高さによってどのように異なるのかについても明らかにした(笹竹, 2010)。

## 2. 研究の目的

性犯罪に対する女子大生の防犯意識はなぜ高まらないのか、その阻害要因を明らかにすることが研究の目的である。

防犯意識と関連すると考えられる要因は、人口動態要因や居住環境、楽観主義バイアスなどであり、これらの要因と防犯意識の関係を明らかにすることを本研究の目的とする。特に楽観主義バイアスは、概念構成を再検討し、防犯意識に関連するような測定方法を考えることにする。

## 3. 研究の方法

### (1) 防犯意識と人口動態要因との関連の研究

平成18年12月から平成19年4月にかけて、中部地方のA女子大学の学生359名(全員女子)に調査を実施した。なお分析を行ったのは平成22年である。

人口動態要因として、調査対象者の年齢、居住形態(家族と同居・一人暮らし)を取り上げ調査した。被害状況については、過去1年間に性犯罪(変質者に会う)にあったことがあるかという直接被害体験と、過去1年間に家族や友人がこれらの犯罪被害にあったことがあるかという間接被害体験をそれぞれ2件法で調査した。防犯意識については、Riger & Gordon (1979)の防犯行動についての考え方に基づいて、回避、リスク管理、一般的防犯意識を測定した。

回避とは危険な場所を避けたり、身体の露出する服を着ることを避けるという意味であり、「防犯のために、人通りの少ない道路は昼間であっても避けようと思う」など3項目を作成した。危機管理とは、危機場面での対応のために防犯ベルを所持することや、行動や態度が不振な人物とは目を合わせないなどの危機管理を意味し、「夜外出するときは家族や友人に付き添ってもらおうと思っている」など3項目を作成した。一般的防犯意識とは、防犯のための心構えや認識を意味し、「犯罪被害を防ぐ対策を行う必要があると思う」など3項目を作成した。

以上の防犯意識の調査項目は、「非常に当てはまらない」(1点)、「当てはまらない」(2点)、「どちらでもない」(3点)、「当てはまる」(4点)、「非常に当てはまる」(5点)の5件法で得点化を行った。

### (2) 防犯意識と楽観主義バイアスとの関連の研究

中部地方のA女子大学(私立4年制)の2年生177人、3年生43人、4年生109人の計329人を調査対象とし、平成21年1月に調査が実施された。

調査項目は、被害体験、防犯意識(回避、リスク管理、一般的防犯意識)、楽観主義バイアスである。楽観主義バイアスについては、その内容を頻度と程度に分け、それぞれ直接法と間接法の2種類の方法により測定した。

楽観主義バイアスについては、その内容を頻度と程度に分け、それぞれ直接法と間接法の2種類の方法により測定した。

楽観主義バイアス(頻度)を直接法で測定するために「あなた自身が、変質者に会うという犯罪被害にあう可能性は、同年齢の女性と比較すると、低いでしょうか、高いでしょうか、推測して回答してください。」という質問項目を作成し、「低い」(1点)、「やや低い」(2点)、「どちらでもない」(3点)、「やや高い」(4点)、「高い」(5点)の5件法で回答を求めた。

上記の質問に対して「低い」、「やや低い」と回答した者を楽観主義バイアスが認められると考え、楽観主義バイアス(頻度・直接法)あり群とし、その他を楽観主義バイアス(頻度・直接法)なし群とした。同様にして楽観主義バイアス(程度・直接法)あり群と楽観主義バイアス(程度・直接法)なし群を作成した。

楽観主義バイアス(頻度)を間接法で測定するために、自己評価として「あなた自身が、変質者に会うという犯罪被害にあう可能性を推測してください。」という質問項目を作成し、また他者評価として「あなた以外の同年齢の女性が、変質者に会うという犯罪被害にあう可能性を推測してください。」という質問項目を作成し、「被害にあうことはない」(1点)、「被害にあうことはあまりない」(2点)、「どちらでもない」(3点)、「被害にあうことがややある」(4点)、「被害にあうことがある」(5点)の5件法でそれぞれ回答を求めた。そして他者評価の値から自己評価の値を引いて差を算出した。楽観主義バイアスは、自己のリスク評価よりも他者のリスク評価を高く評価しているため、この値がプラスの値になった者は楽観主義バイアスが認められると考え、楽観主義バイアス(頻度・間接法)あり群とし、その他は楽観主義バイアスが認められないと考え、楽観主義バイアス(頻度・間接法)なし群とした。同様にして楽観主義バイアス(程度・間接法)あり群と楽観主義バイアス(程度・間接法)なし群を作成した。

## 4. 研究成果

### (1) 防犯意識と人口動態要因との関連の研究

犯罪の直接被害がある場合において、間接被害や居住形態によって防犯意識に有意な差が認められた。

性犯罪の直接被害（直接被害あり群、直接被害なし群）と性犯罪の間接被害（間接被害あり群、間接被害なし群）を独立変数とし、防犯意識のひとつであるリスク管理を従属変数として、 $2 \times 2$ の分散分析を行った。分散分析の結果、有意な交互作用が認められた ( $F(1, 354)=5.70, p<.05$ )。そのため単純主効果の検定を行った。その結果、直接被害あり群における間接被害の単純主効果 ( $F(1, 354)=10.97, p<.01$ ) が有意であった。つまり直接被害あり群において間接被害あり群の方がリスク管理が高いことが示された。つまり直接被害があり、かつ家族や友人が被害にあっていると、そうでない場合よりも防犯意識が有意に高いことが明らかとなった。この結果は、犯罪被害体験が自己だけではなく、誰にでも起こりうるという認識を、間接被害の体験によって持つことができたことによるものと考えられる。すなわち自己だけの犯罪被害の体験（直接被害の体験）では、被害にあったことはたまたま運が悪かったためであって、今後再び犯罪の被害にあう危険性は少ないと認識する場合もある。ところが友人や家族が犯罪被害にあっている場合、犯罪被害は誰にでも起こりうるものだという認識に至り、防犯意識を高く持つものと考えられる。この結果を Fig.1 に示す。

また直接被害があり、かつ一人暮らしである場合は、家族と同居している場合に比較して、防犯意識が高いことが明らかとなった。性犯罪の直接被害（直接被害あり群、直接被害なし群）と居住形態（家族同居群、一人暮らし群）を独立変数とし、防犯意識のひとつである総合的防犯意識を従属変数として、 $2 \times 2$ の分散分析を行った。分散分析の結果、有意な交互作用が認められた ( $F(1, 352)=4.40, p<.05$ )。そのため単純主効果の検定を行った。その結果、直接被害あり群における居住形態の単純主効果 ( $F(1, 352)=6.35, p<.05$ ) が有意であった。つまり直接被害あり群において一人暮らしの方が、総合的防犯意識が高いことが示された。この結果は犯罪被害にあっても、家族と同居していれば心細さをそれほど強く感じないが、一人暮らしの場合は、心細さを強く感じるということを示しているものと考えられる。この結果を Fig.2 に示す。

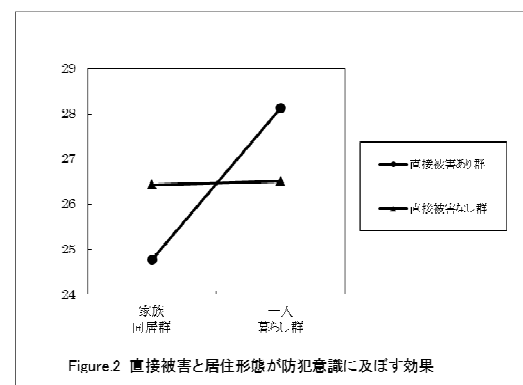
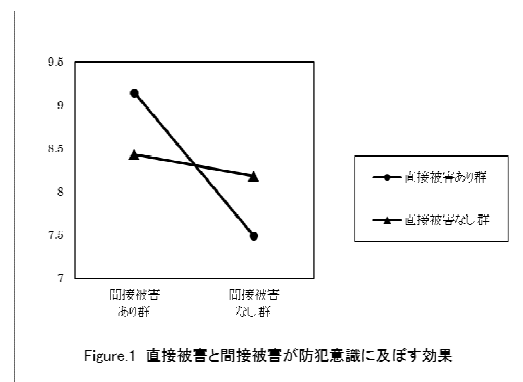
## (2) 防犯意識と楽観主義バイアスとの関連の研究

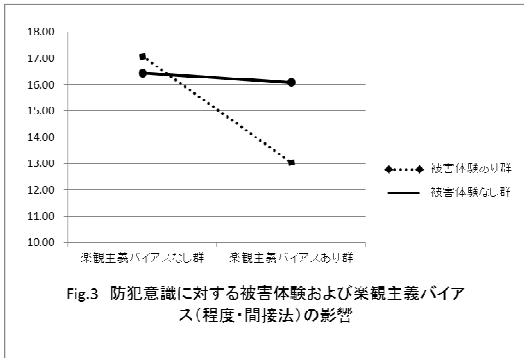
防犯意識に対する被害体験および楽観主義バイアスの影響を調べた。被害体験あり群・なし群と楽観主義バイアス（頻度・直接法）あり群・なし群を独立変数とし、防犯意

識を従属変数として、 $2 \times 2$ の分散分析を行った。その結果有意差は認められなかった。したがって、被害体験と楽観主義バイアス（頻度・直接法）は、防犯意識に影響を与えているとはいえないことが示された。同様に被害体験あり群・なし群と楽観主義バイアス（頻度・間接法）あり群・なし群についても分散分析を行ったが、有意差は認められなかった。

同様に被害体験あり群・なし群と楽観主義バイアス（程度・間接法）あり群・なし群を独立変数とし、防犯意識を従属変数として、 $2 \times 2$ の分散分析を行った。その結果交互作用が認められた ( $F(3, 1)=6.81, p<.01$ )、単純主効果の検定を行った結果、被害体験あり群における楽観主義バイアス（程度・間接法）の単純主効果 ( $F(1, 324)=11.00, p<.01$ )、楽観主義バイアス（程度・間接法）あり群における被害体験の単純主効果 ( $F(1, 324)=5.85, p<.01$ ) が有意であった。この結果を Fig.3 に示す。

したがって被害体験のない場合には、楽観主義バイアス（程度・間接法）によって防犯意識に違いは認められないが、被害体験がある場合には、楽観主義バイアス（程度・間接法）あり群の方が、防犯意識が有意に低下することが示された。





## 5. 主な発表論文等

(研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

笹竹英穂，女子大生の防犯意識と人口動態要因(年齢・居住形態・犯罪被害体験)の関係，中京女子大学教育研究紀要，査読有，13，2010，91-102

〔学会発表〕(計1件)

笹竹英穂，大学生のデートDVにおける心理的束縛の実態について，日本家族心理学会，2012年8月27日，鹿児島女子短期大学

〔図書〕(計2件)

- ① 笹竹英穂，丸善，カウンセリング実践ハンドブック，2013，704
- ② 笹竹英穂，北大路書房，コンパクト犯罪心理学 初歩から卒論・修論作成のヒントまで，2013，132